

—《書評》—

洪郁如著 法政大学出版社

『誰の日本時代——ジェンダー・階層・帝国の台湾史』

(日本大学) 三澤 真美恵

忘れ難い光景がある。ヒマワリ市民運動の翌年2015年に起きた台湾の高校生による「反黒箱課綱運動」(Anti-Black Box Curriculum Movement)だ。幼さを残す顔つきの彼らが、教育を受ける側の立場から、「課綱(日本の教育指導要領にあたる)」の審議過程や内容に異議申し立てを行う姿に衝撃を受けた。彼らが、座り込みやデモで掲げたスローガンのひとつが「自己歴史自己写(自分の歴史は自分で書く)」だった。

そこには、政府主導の大文字の／公式の「自己歴史」に対抗する、それまで「他者化」されてきた小文字の／非公式の「自己歴史」への渴望が見て取れる。実は、ヒマワリ市民運動が起きた2014年末には、早くもデジタル世代の若者によるニューメディア・グループ「台湾吧(Taiwan Bar)」が発足しており、彼らの視点から台湾の歴史や文化を紹介するYouTubeチャンネルがスタートしていた(最初の作品「動画台湾史」は瞬く間に再生数が数百万回を超えた)。その意味で、高校生たちのスローガン「自己歴史自己写」はヒマワリ市民運動に参加したデジタル世代の活動を継承するものだったといえる。

本書の著者も、YouTubeチャンネルやワークショップなどを通じて台湾研究の知見を日本の修学旅行世代や一般に向けて発信する「日本台湾教育支援研究者ネットワーク(通称:SNET台湾)」の共同代表を務めている。

こうした著者の活動と現代台湾における歴史をめぐる議論を考え合わせると、本書もまた「自己歴史自己写」の実践とみなしうる。本書の表紙が著者の両親の結婚式(1968年)で撮影された一族勢揃いの記念写真で飾られていることにも、そう

した方向性がうかがえる。第四章には(還暦で文字を学び始めた)著者の母方の祖母のエピソードが語られ、第七章では著者の義祖母(夫の母方の祖母)の日記を中心に論が進められる。謝雪紅など著名な革命運動家の自伝や、近年活発な台湾女性史・台湾郷土史による口述記録も引用されているが、著者自身による親族への聞き取りがもつ熱量は格別である。著者が語る通り、これは台湾社会史であると同時に著者の家族史でもある。台湾社会史と自らの家族史、日本植民地統治期と戦後の国民党一党独裁時期という切り離すことのできない生の連続性や社会の重層性を、ジェンダー史研究で培ってきた問題意識で撚り合わせたところに、本書の方法論的な独創性がある。

本書の構成

本書の構成は以下のようになっている。

はしがき

第一章 理解と和解の間——「親日台湾」と歴史の記憶

第二章 読み書きと植民地——台湾の識字問題

第三章 植民地の法と慣習——台湾社会の女兒取引をめぐる諸問題

第四章 近現代台湾女性の識字とエンパワーメント

第五章 植民地台湾の製帽業に見られるジェンダー・階層・帝国

第六章 帝国日本のなかの女性の移動——台湾を中心に

第七章 戦争記憶と植民地経験——在台日本人女性の日記から

第八章 ある台湾人少女の帝国後——嶺月の文学活動と脱植民地化

第九章 戦後の台湾農村における学歴と教職

あとがき

本書のタイトルと問題意識

「はしがき」には、本書タイトルにある「日本時代」が1895年～1945年の日本による台湾の植民地統治時期を指すことが記されているが、「誰の」については明示されていない。ただ、「日本人の「台湾時代」は、時間と空間軸から見れば、台湾人の「日本時代」と対になるはず」(vii頁)という文言がある。ここから、本書タイトルは「台湾人の日本時代」を含意したものと推測される。ただし、本書が繰り返し注意を促すのは、「台湾人の日本時代」が決して一様ではなく、ジェンダー、階級、民族の違いによっていかに異なっていたか、という点である。「脱帝国化の課題に国家レベルで取り組むことのなかった戦後日本」(iii頁)では、台湾の「日本語人」が語る日本時代によって「親日台湾」イメージが導かれてきたが、「日本時代に生きた人間」の大多数は日本語を使いこなせる「日本語人」ではなかった。それゆえに、著者は「日本時代に生きた人間の歴史的体験と記憶への理解」には、「書かれなかった、語られなかった民衆層の歴史体験に取り組むことが非常に大切」(v頁)という認識に立って、彼らの歴史体験に取り組む第二章以後について、以下の四つの問題意識を掲げる。すなわち、①学校教育の周縁や外側に排除された人々に焦点を当てる、②彼ら農山漁村の住民と都市部の労働者は、日本統治期台湾民衆層の大半を占め、戦後台湾の市民社会の構成主体であり、社会の底辺と捉えることは妥当でない、③ジェンダーの視角から、帝国と植民地における重層的な権力関係のもとに不可視化されてきた女性たちの姿を浮き彫りにする、④日本時代が残した影響の深さを知るために戦後史を視野に入れる、である。こうした問題意識にもとづいて、本書は「語られてきた日本時代と、語りの外側に置かれてきた人々の日本時代」について、「新たな視座を提供しようとする」(viii頁)ものと位置付けられる。

つまり、『誰の日本時代』というタイトルは、日本人、日本語資料、「日本語人」の語る日本時代に依拠する「(脱帝国化の課題に取り組んでこなかった)戦後日本」の台湾理解に対する、きわめて鋭い批判を含んだ著者からの異議申し立てであり問題提起である。同時に、「語りの外側に置かれてきた人々」(言い換えるならば、「自己歴史自己写」が不可能だった人々)の日本時代に目を向けさせる戦略的選択でもある。著者は第一章で、「日本語人」が日本語で語ることを選択するときには「日本社会に対する発信力」が意識されていたと指摘する(6頁)。日本語を母語としない著者が、日本語で日本人に向けて本書を執筆した意味にも注意する必要がある。

本書の概要

本書の第二章以後では、もっぱら「語りの外側に置かれてきた人々」の歴史体験に紙幅が割かれているが、第一章ではまず、「語りの内側」にいた「日本語人」と「語りの外側」にいた「非日本語人」の間にある階層的断絶、「日本語人」の日本語テキストがもつ特殊性と限界性を示すことで、第二章以後「非日本語人」の歴史体験に取り組む重要性が裏書きされる。同時に、「語りの内側」にいた「日本語人」による過去の歴史に対する「非批判的な語り」にしても、それらが必ずしも「親日」的な読み収められないことを、彼らのテキストに含まれる差別体験の記憶、戦後も「植民地の傷痕」を抱えた痛みなどによって明らかにする。次いで、世代間(戦前世代、国民党統治下の世代、民主化後の世代)の歴史記憶の差異を整理し、その「断絶を縫い合わせる」ためにも、「戦前世代の日本時代の記憶、すなわち植民地支配下の台湾史叙述を再構築する」(19頁)必要があると説く。つまり、第一章は、本書の肝である第二章以後の「非日本語人」の歴史体験という既存の台湾史叙述における「ネガ」を扱うにあたって、「日本語人」

という「ポジ」を通じて問題の所在を明らかにしているといえる。

第二章は、書房（旧時の家塾）や公学校の数が足りず、教育内容も台湾人が求めるものと乖離していた植民地期において、農山漁村ではなおのこと教育が手の届かない奢侈品であった事実を強調する。そうしたなか、農山漁村で公学校に通った洪掛（1906年生まれ）と陳文敏（1920年生まれ）の二人は稀有な事例である。彼らには、家族のうち他の成員に教育歴がない家庭において、経済状況に余裕ができたタイミングで学齢に達した末っ子だった、という共通点がある。「日本統治期の教育熱は、近代化の追求として解釈され、台湾人の主体性の象徴と理解される傾向がある」が、実際には「植民地社会に生まれた青少年たちは、教育資源の貧弱さと混乱、体系的でない知識の問題に直面」（53頁）していた。無学の世界から脱却を図ろうとしても、植民地の政治的経済的現実により叶えられなかった、こうした「文盲」と呼ばれる民衆の傷痕」（54頁）に対し、ジェンダーの視角から考察を加えるのが第三章から第五章である。

なかでも、第三章で著者が着目するのは、台湾の伝統的な女兒取引の慣習、養女、媳婦仔（シンブアー）、査某嫻（ツァボカン）にあたる女性である。そもそも台湾では上記三者の境界は必ずしも明確ではなかった。著者は字義や起源、法的な扱いを比較したうえで「もらって（または買って）育てる娘」という共通項で三者を捉え、彼女たちが人身売買の対象として、時に「家庭内奴隷」（76頁）ともいえる立場に置かれていた実態を示す。植民地当局はこれらの慣習が人身売買、終身拘束、虐待・売春問題と深く関連していることを認識しており、「無頭対（夫となる男子が未定）」の媳婦仔や査某嫻については法的にこれを認めない立場を取ったが、養女や「有頭対（夫となる男子がいる）」の媳婦仔は引き続き認めたため、事態の改

善は図られなかった。1930～31年に国際連盟がアモイの台湾人「売笑婦」と養女縁組問題に関する実地調査に乗り出した際にも、巧妙な書面報告で実態を隠蔽した。在地エリート層のなかでも、連温卿や張深切のように、この問題に関心を持った知識人は少数であり、多くの場合は傍観者の態度に留まっていた。

第四章では、こうした男尊女卑の通念と経済事情の双方によって阻まれていた女性の教育に対する渴望が描かれる。媳婦仔だった簡香（1930年生まれ）が実母の教育に対する執念によって就学の機会を得た例や、女友達には誰一人学校に通える者がなかったという江香（1925年台中州北斗郡の農村生まれ、著者の母方の祖母）、「女が学校に行けるもんか。家でおとなしく笠を50個編め」と養父に一喝された呉廖儉、子守りなどの家事労働のために女子は学校に行かせてもらえなかったという洪塩（1923年生まれ）など、いくつもの具体例が挙げられる。そこから浮き彫りになるのは以下の点である。①幸運にも公学校へ入学できた女子も中退率がきわめて高く、②労働の妨げにならない教育形態が彼女たちにとってほぼ唯一の選択肢だったが（国語講習所では女子の比率が男子より高い）、③正規の教育システムから排除された人々が集まったそうした教育機関に接続するその後の学習機会はなく、彼女たちは最終的に「自学自習の道を模索」（100頁）するしかなく、「学習の断片化」（同前）という現象が起きた。それでも、わずかな資源を総動員して絶えず「字を読む」能力を高めようとする努力、著者の外祖母が還暦を迎えてから読み書きの自学自習を始めたエピソードには心が揺さぶられる。同時に、当事者の語りでは「非識字」は「問題ではなく運命として解釈」（109頁）される傾向があった。したがって、尋常ならざる努力によって「貧困、家父長制、非識字者から脱出し、革命運動家」になった謝雪紅が、当初は「運命」と諦めていた境遇が実のところ「帝

国主義と資本家による搾取だった」と語り直す力を得たことは、まさに「例外中の例外」(109頁)であったことが、真にリアリティをもって感得させられる。

彼女たちの教育への渴望を阻害した男尊女卑の通念と経済事情については、第五章においてさらに、植民地期台湾の「花形産業」といわれた製帽業の分析を通じて詳述される。植民地の「開発」と「近代化」を肯定する論調に対し、本書は「労働者層の視点から」収奪の側面に光を当てる。ここでも、謝雪紅の自伝の「これまで重要視されてこなかった幼少期から成人期にあたる」部分、「非識字労働者による日本時代の歴史の記憶を詳細に」語った部分と、郷土史家の手による呉廖倫へのインタビューが効果的に使用されている。同時に、「副業」と呼ばれた植民地女性の多就業形態について、階級、民族、ジェンダーの問題が複雑に交錯した植民地の経済構造のなかで、彼女たちは複数の仕事を掛け持ちしなければ生きていけず、それでも貧困から抜け出せない実態があったことに注意を促している。「日本の台湾統治をめぐる「近代化」言説が無批判に流通している現状を踏まえ」、著者は「労働者の語り」に「鮮やかに織り込まれている」(140頁)植民地批判に耳を傾ける必要を訴える。

第六章では日本帝国内の女性の移動に着眼し、「縁故型」移動という特徴を指摘しつつ、謝雪紅の事例から、労働者にとっての帝国内移動には生計維持と社会的上昇の契機が期待されていたことを示す。さらに、第三章で触れた媳婦仔や養女の慣習を利用した人身売買については「戦争期の慰安婦問題」と密接な関係(173頁)をもつ「隠された移動」(172頁)として指摘している。

本書のなかで、唯一日本人を主題として扱っている第七章では、戦時下の台湾で幼い娘を養育しながら、召集されて中国の戦地に派遣された警察官の夫の留守を護った開原緑(1917年広島生ま

れ)の日記を中心に、戦時下の在日日本人女性の生活史、すなわち「日本人の台湾時代」が描かれる。開原緑は著者の義祖母(夫の母方の祖母)にあたり、日記は彼女の死後に著者の義母(夫の母)が発見したものという。著者が日記から読み取るのは、戦時下の後方に残された在日日本人が頻繁に往来してトランプやかかるた遊びに興じて「銃後」の不安を散じる様子や、家長不在による「わたしの時間」に映画や小説などの娯楽を楽しむ姿、裁縫仕事による自己肯定感、空襲や疎開の緊迫感である。同時に、著者は「この日記には、台湾人が全く登場しない」こと、植民地の統治集団による台湾人社会に対する「見れども見えず」の状況を指摘している。緑の夫で植民地警察官だった開原誠が、戦後の台湾人戦友との交流のなかで日本人の差別意識が残存していたことに気づくエピソードも印象的だ。本章には鍾堅『台湾航空決戦』(麦田出版、1996年)と当時新埔国民学校の教員だった杜潘芳格の日記『フォルモサ少女の日記』(下村作次郎編、総和社、2000年)を対照させた年表も付されている。

第八章は、植民地期に「少国民」だった世代に属する作家・嶺月(本名は丁淑卿、1934年生まれ)に着目する。植民地期の初等教育を終え、中華民国の中等教育に接続した嶺月の「国語力」、日本へのまなざし、自伝的小説にあらわれた「中国」と「中国人」の意味を分析することを通じて、「帝国の子どもたちの脱植民地化」を解明するための手がかりを示す。著者は、嶺月の文学作品とライフ・ストーリーを読み解くことで、「日本」と訣別して「中国」に接続されるという単線的な変化ではなく、両者の外部化と内部化が絶えず入り混じるなかで主体を形成していった世代の脱植民地化の歩みを描き出している。

最終章となる第九章では、戦後台湾社会の民衆層にとって、義務教育の実現と進学による新しい選択肢の出現が、いかなる影響をもたらしたのか

を論じている。1961年の時点でも、台湾全体の小学校進学者の中退率は13%であり、彼らが「文盲」として社会に送り出された事実を背景に、半農半漁の一族（子供は女3人、男5人）のうち初めて中等以上の教育を受けた三男と四男のライフ・ストーリーが詳細に語られ、家族内と世代間における教育資源の継承が明らかにされている。

「あとがき」には、本書を閉じるに相応しい著者自身の語りが披歴される。すなわち、「語りの外側」に置かれてきた台湾人の「もう一つの日本時代」と、著者自身の「もう一つの家族史」が重なる地点が示される。「考えてみれば、警察官として新竹に駐在した義祖父と、日本人警察からの暴力を受けた彰化の外祖父は、日本時代にはそれぞれ支配側と被支配側に分かれていた」（289頁）、と。「義祖父」は第七章の日記の書き手である開原緑の夫・開原誠であり、「外祖父」は第四章で登場した還暦で文字を習い始めた著者の母方の祖母・江香の夫であり、日本人警官に連行されて「鼻から水を注入」（287頁）された経験をもつ。二人の祖父のエピソードを対置する「あとがき」は、したがって台湾社会史と著者の家族史、語られてきた歴史体験と語られてこなかった歴史体験が、「メビウスの輪」のように貼り合わされている事実を映し出して鮮やかである。

そのうえで著者は「もう一つの日本時代」を提起することは、告発でもなく、糾弾でもない。日本と台湾の間には、戦後の民間社会の交流の中で一步一步、着実に築き上げてきた信頼関係があるからこそ、これからも互いの過去の歴史に向き合い、理解を深めるという、本当の意味での和解が実現できると信じている」（290頁）と結ぶ。

本書の意義と展望

著者は前作『近代台湾女性史——日本の植民統治と「新女性」の誕生』（勁草書房、2001年）においてすでに、自身の家族には「新女性」は一人

もいなかったと語り（同前書、405頁）、「日本語はおろか、文字さえも読めない」母方の祖母が、一句もつまずくことなく日本語の童謡「赤とんぼ」を歌った場面を紹介し（同前書、405頁）、自学自習で日本語を学んだ謝雪紅に言及しながら「しかし大多数の台湾語人は、相変わらず壁の向こう側に隔離されたまま」で戦後を迎えたとして、自身の課題を明示していた。その意味でも、本書はまさに著者自身の「台湾を知る」営みが「新しい段階」に入ったことを示す成果といえる。

駒込武は本書に関する「読書ノート」で、朝鮮史の領域では金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー——就学・不就学をめぐる権力関係』（世織書房、2005年）が民族の観点に加えて、ジェンダーの観点、階級的な観点を総合的に追究する必要を説いてきたことに触れ、「確かにその通りではあっても、何を資料として、どのように論じていけばよいのかと考え始めると、事は単純ではない」、「語りの外側に置かれた人々に関する資料はきわめて限られるからである。本書は、この難事業を、見事に成功させている」と述べている（Facebook、2021年8月21日）。

したがって、本書の第一の意義は、これまで「語りの外側」に置かれてきた、すなわち既存の研究では周縁化されてきた非日本語人ないし非識字者の歴史体験に光を当てたことである。とりわけ、これまでほとんど論じられてこなかった非識字女性たちの教育に対する渴望をきわめて具体的に描き出した点が重要である。第二に、それを可能にした方法論、すなわち「語りの外側」にある人々の歴史体験を「いかに語るか」を実践的に示したことである。本書は限られた資料しかないなかで、既存の統計資料や法令、自伝、評伝を別様に読み直し、新たに発掘した日記や自ら聞き取ったオーラル・ヒストリーを組み合わせ、社会史と家族史を組み合わせ、新たな文脈を展開してみせた。第三に、ジェンダーや民族だけでなく階級という

要因を導入し、産業史研究や統計資料なども取り入れることで、「語りの外側」に置かれる人々が、植民地統治下の構造によって(本書副題にある「ジェンダー・階層・帝国」の要素によって)生み出されたことを浮き彫りにしたことである。第四に、本書が可視化した「もう一つの日本時代」が、日本人、日本語資料、「日本語人」の語る日本時代に依拠してきた我々の台湾理解(それは往々にして「親日台湾」に収斂する傾向がある)に鋭い疑問を投げかけている点である。

最後に課題と展望を述べる。本書は、これまで「語りの外」に置かれてきた人々の歴史体験を生き生きと語っているが、他方で分析概念の検討や先行研究の整理には十分な紙幅が割かれていない。著者は論集『性別与権力(台湾史論叢 女性篇)』(台湾大学出版中心、2020年)の主編も務めた台湾ジェンダー史研究の泰斗である。本書の各章で、簡略的にでも各トピックに応じた研究状況の紹介や鍵概念の説明があれば、著者の切り拓いた地平の意義がより明確になったと思う。

また、駒込武が指摘したように、本書は「常態的不就学」こそが、植民地期朝鮮人教育の現実であることを明らかにした金富子の研究と呼応する内容をもっている。金富子は不就学が近代性と共に同化圧力からの排除でもあったという両義性(どちらも暴力として機能した)を指摘している。本書では近代性からの排除という側面が前景化していたが、後者の側面についてはどうだったのか。他地域の関連研究との対話によって、本書が提示した視座はさらに深められるように思う。

また、これは無いもの強請りであろうが、「語りの外側」に置かれてきた人々に着目する本書においても、「台湾語人」ではない先住民族や、日本軍管理下にあった性奴隷「慰安婦」の問題は、なお「語りの外側」にある。

前者については言語的ないし資料的な制約があることは想像に難く無い。ただ、後者については、

著者自身も前作の「はしがき」で、旧植民地の女性への関心が「実は慰安婦問題を直接的な契機として起こってきた」(同書、1頁)と述べ、本書でも女兒取引に関する第三章や「隠された移動」としての人身売買に言及した第六章などで「慰安婦」問題への関連が示唆されている。この点で、本書は「戦時性暴力が極限状態の問題だけでなく、日常世界と地続きの問題であるという視点」(歴史学研究会・日本史研究会編『慰安婦問題を／から考える』岩波書店、2014年)で朝鮮女性が「慰安婦」として戦地に駆り出されていく背景として植民地の日常を考察した宋連玉(同前書)の研究とも重なる内容をもっている。

本書を読みながら評者の脳裏に去来したのは、台湾の元「慰安婦」被害女性たちを記録した映画『葦の歌(原題:蘆葦之歌)』(2015年、呉秀菁監督)で台湾先住民族のイアン・アパイさんが、日本語で書かれた聖書の文字を、指先でひとつひとつたどりながら声に出して読む姿だった。高齢になってから教会に通い始めた彼女は、信仰により力を得たことと共に、「教会では聖書を読むこともできる」と先住民族の言葉で語っている。「わたしには勉強する習慣がなかったから、教会に行くことを渴望した」と。それは、まさに本書が伝えてくれた「もう一つの日本時代」体験者の姿、「無学の世界からの脱却」を図り、限られた資源を総動員して「自らの巻き返し」により「傷痕」を「克服」しようとする姿である。

統治者たる日本人の「台湾時代」にとって台湾人社会は「見れども見えず」(206頁)だった。ならば、もはや統治者でなくなった現在の日本人に、台湾人社会は「見えて」いるだろうか。「脱帝国化の課題に取り組んでこなかった」日本において、本書の問題提起はきわめて重い。

(2021年5月、306ページ、2,800円+税)